

平成版「かがのとかるた」作成の試み ― 地域教材開発をめざす言語活動として ―

Attempting to create Heisei Kaga Noto karuta — developing local teaching aids for language activities —

馬場 治

Hajimu BABA

〈要旨〉

日本の伝統的な言語文化の一つである「かるた」には「小倉百人一首」や「いろはかるた」など様々な種類がある。「かるた」とは読み札（言語情報）と絵札（視覚情報）を組み合わせて遊ぶカードゲームであるが、有名な和歌や俳句・慣用句や諺などを暗記することによって自然と語彙力を身に付けることができる習得型の教材と言える。これを活用型の表現教材とすることはできないものかと思案し、「いろは」四十八枚の配列型で俳句式の五七五（音数律）に乗せ、季語や季節の代わりに地域の名所や名物を紹介する一句、そのイメージを代表する画像を石川県の各市町村が運営する観光協会等のホームページから検索して貼り付け（URL明記）、絵札素描の図案見本とする、平成版「かがのとかるた」の作成を試みた。

〈キーワード〉

かるた 言語文化 俳句式 地域教材 交流学習

一 かるた教材について

お正月の家族団欒で「小倉百人一首」や「いろはかるた」に興じた経験がある人は多いだろう。「かるた」は平安時代に二枚貝の貝殻を使った雅な宮廷の遊び「貝合わせ」を起源とし、戦国時代に日本へ寄港したポルトガル船が伝来した紙製板状の室内遊具であるカルタ (carta・加留多・骨牌) と融合し、和風独自の発展を遂げた。家庭へと普及したのは都市文化が形成され町人や商人が活躍した元禄時代である。「江戸いろはかるた」には現在も人口に膾炙している諺「㊦犬も歩けば棒に当たる」「㊧論より証拠」「㊨花より団子」等が収録されている。ゲーム成立の必要人数は読み手一名・取り手二名以上である。全ての字札を読んで取った絵札の枚数を競い合うだけのシンプルな遊びだが、記憶力と反射神経が勝負の要である。ま

た、遊びを通じて日常生活における教訓を学ぶこともできる。

読み札の情報量は「小倉百人一首」の和歌では三十一文字（音節）、俳句だと十七音節である。小学生が作成しやすいのは後者の方であろう。なぜなら「火の用心 マッチ一本 火事の元」「飛び出すな 車は急に 止まらない」等の火災防止や交通安全の標語も記憶されやすい五七五のリズムで構成されているものが多く馴染んでいるからである。定型に拘るのは、制約の中で如何に自由に表現するかという言語センスを磨く機会になると考えるからである。更に「かるた」という伝統的で身近な遊具に仕立てることによって相乗的な教育効果が期待される。

『小学校学習指導要領第一章各教科第2節国語』も「(伝統的な言語文化に関する事項) (1)「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。(ア)易しい文語調の短歌や俳句について、情景を

思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」と謳っており、「短歌の五・七・五・七・七の三十一音、俳句の五・七・五の十七音から、季節や風情、歌や句に込めた思いなどを思い浮かべたり、七音五音を中心としたリズムから国語の美しい響きを感じ取りながら音読したり暗唱したりして、文語の調子に親しむ態度を育成するようにすることが重要である。……各地域に縁のある歌人や俳人、地域の景色を詠んだ歌や句を教材にすることも考えられる。また、短歌や俳句を自分でもつくってみようという気持ちをもつように指導することも大切である。実際につくってみることで、よさを実感し、音読することの意義を深く理解することになる」⁽¹⁾との解説がある。また、小学校教科書『国語 三下 あおぞら』⁽²⁾には単元名「かるたについて知ろう」【読む】教材名「かるた」が設けられている。作者の江藤崇氏（一九四二年、東京生まれ。法学者。かるた研究者）は「いろはかるたや百人一首は、多くの人に親しまれています。ほかにも、動物かるた、俳句かるた、わらべ歌かるたなど、いろいろなかるたが生み出され、楽しまれています。また、全国の都道府県や市区町村で作られる郷土かるたもあります。ちいきの名所や特産品、人物などを取り上げていて、そこに住む人たちに大切にされているかるたです。かるたは、小さくて手軽な遊び道具です。けれども、先人のちえが詰まった、おきななおくり物でもあるのです」と結び、教材としての価値や可能性について示唆している。様々なジャンルのうち、今回は「郷土かるた」の作成を試みる。なぜなら、石川県は里山里海の自然に恵まれ、加賀百万石の城下町として歴史と文化が凝縮された日本屈指の観光都市金沢を擁しており、そこに北陸新幹線の開業という慶事が重なり、時宜に合った教材だと考えたからである。「郷土かるた」に関しては「郷土を代表するような様々な事項（自然・歴史・文化・産業など）を織り込んだ『いろはかるた』の一種である。そのため、児童・生徒はかるた遊びを通して、知らず知らずのうちに郷土について認識（知識面・情意面を含む）していくようになるが、このことは郷土認識を重要な教育目標の一つとしている社会科教育にとって注目に値するものといえる」⁽³⁾との言及がある。国語科のみならず社会科教育にも効果があるとすれば試作意欲も高まる。郷土の地理・歴史およびトレンド・トピックに関心を持ち、選り出した情報を五七五の音数律に乗せて言語表現し、イメージを代表する画像を添えて多くの人々へと発信伝達することは、PISA型読解力における「情報の取り出し」「解釈・理解」

「熟考・判断」「自分の意見を表現する」にも通じ、知識の習得から活用へと向かう。俳句が絵画と相性の良いことは、俳画（俳諧画とも）という日本画の一形式があることから分かる。俳句を題材にしてその一句の内容を絵画として表現する書画一体形式は、雄大な写生句「菜の花や 月は東に 日は西に」で知られる与謝蕪村『おくのほそ道図屏風』によって近世後期に大成されたが、少ない情報量から想像力を働かせてイメージを喚起させる俳句は映像的な言語表現形式と言える。蕪村のように一句全体で一幅の風景画を彷彿とさせる場合もあるが、時には、上五・中七・下五ごとに映像が思い浮かぶ句もある。例えば、短歌俳句の革新運動で蕪村を賞揚した正岡子規の著名句「柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺」である。ちなみにWEBの検索エンジンGoogleで「奈良県の柿」「法隆寺」とキーワードを入れると次の映像が見つかったので、URLを明記して掲出する（注：無断転載を禁ずること。注：転載する表示はなかった）。



季語は「柿」
季節は「秋」

富有柿／家庭用お徳用1キロ：農悠舎土隠堂 <http://www.nouyusha.com/?pid=35304451>
奈良／連子窓の桜に魅せられて：世界遺産・法隆寺 <http://itabiner/?p=3150>（平成26年12月19日閲覧）
デジタルカメラが普及した現代では「写真俳句」（作家・森村誠一）という新たなジャンルも成立した。いま筆者が昨年冬に雪化粧をした卯辰山を撮影した際に創作した拙い一句を例示しておく。



卯辰山 雪に烟れる
見晴らし台

「郷土かるた」の作成において身近な場所ならともかく、余程の時間や経費がない限り遠い現地に出掛けて自ら撮影することは困難である。そこで次善の方法としてWEBの検索エンジンによって当該画像を見つけ出すことにした。但し、間接的な画像はURLを明記するにしても、著作権や肖像権に抵触する場合もあるので、あくまで絵札素描の図案見本としての学習用に止めるべきであろう。その見本を元に改めてイラスト等にすれば問題がないと考える。図工の学習への発展も期待できよう。読み札については俳句式とはいえ、季語や季節の代わりに地域の名所や名物を紹介することを重視する。従って、第一に皆が納得する地名や人名を選出することが大切である。次にその特徴を自分の言葉によって如何に五七五に仕立てるかと言語活動の要となる。時には字余りになることもあるが、それは六音節や八音節の固有名詞(地名や人名)なら仕方がない。無理に直さず許容すべきであろう。

二 昭和版「かがのとかるた」について

「かがのとかるた」が作られたのは昭和59年で、制作者は能登印刷、発行者が「かがのとかるた」刊行会である。制作のきっかけは、昭和58年頃、金沢大学に出入りしていた能登印刷の奥平氏が、群馬県出身の金沢大学の学生から「上毛かるた」の話聞き、関心を持ったことにある。その後同氏の呼び掛けにより、明るい社会づくり石川県民会議、石川県健民運動推進本部、石川県児童文化協会、石川県子ども会連絡協議会、石川県教育文化会議、北国文化事業団らで組織する「かがのとかるた」刊行会を発足させ、能登印刷が主導となって、かるた制作を進めていった。読み札は各小学校の子どもたちから公募し、絵札は1人の小学校教諭が制作した。1部60円で5千部作成され、各学校、一般に対して販売された。制作の翌年の昭和60年春には、「かがのとかるた」大会が開催されているが、大会は1回きりであり以後継続はされなかった。学校教育の面においては、発売当初はいくつかの学校で購入され、活用されていたようだが、その例は僅少ということである。「かがのとかるた」は現在でも市販されており、学校での購入も時折みられている⁽³⁾。同封の紹介文には「郷土の明日を担う子どもたちが、ふるさと石川をよく知り、愛するようにつくったものです。読み札は、県内の全小学校に文案を募集し応募文案300余の中から選んでつくったものです。石川県の歴史、人物、風物など、郷土の姿が、か

るたの一枚一枚に込められています」と記され、当時の情熱が伝わってくる。ページの装丁も格調高い。読み札は次の一覧のとおり。地名や人名は加賀や能登から偏らず採択されている。

【昭和版「かがのとかるた」読み札一覧】

※音節数確定のためルビを付けておく

- ① イヌワシの 勇姿にあすの 石川県
- ② 波濤裂け 奇岩奇石の 能登金剛
- ③ ボラ待ちの 丸太のやぐら 穴水湾
- ④ 富樫泣く 安宅の関の 勸進帳
- ⑤ 理知の人 西田哲学に 名を残す
- ⑥ 流人塔 平家ゆかりの時国家
- ⑦ 河北潟 豪商銭五の 夢ここに
- ⑧ 高峰讓吉 アドレナリンの 生みの親
- ⑨ 総持寺の 門前にぎわう 放生会
- ⑩ 年年に 伸びる小松の エアポート
- ⑪ 落日に 礎石苔むす 天平寺
- ⑫ 卯辰山 秋声鏡花の 文学碑
- ⑬ お旅まつり 子供歌舞伎に 人の波
- ⑭ 家持の 歌に詠まれた 珠洲の海
- ⑮ 県民の 水をたたえる 手取ダム
- ⑯ 米どころ 百万石の 金沢平野
- ⑰ 天文学に 木村栄の Z項
- ⑱ 犀川の 流れも清し 犀星碑
- ⑲ 雪づりに 淡雪やさし 兼六園
- ⑳ 見るほどに 木目美しい 山中塗
- ㉑ 兵四郎 知恵と技術の 辰巳用水
- ㉒ 禅の道 世界に広めた 鈴木大拙
- ㉓ ロクロ挽き 五彩あざやか 九谷焼
- ㉔ 日蓮の 教え伝える 妙成寺
- ㉕ 平国祭 入らずの森の 気多大社
- ㉖ 千里浜の 渚ドライブ 波しぶき
- ㉗ 塗り重ね 沈金さえる 輪島塗
- ㉘ わびさびを うたう千代尼の 聖興寺
- ㉙ 義伸の 火牛のいくさ 俱利伽羅峠
- ㉚ 歴史咲く 県都金沢 森の町
- ㉛ つくり酒 伝統生かす 能登の杜氏
- ㉜ な名も美し 白山比咩の 初詣
- ㉝ 結ぶ袖 友禅流す 浅野川
- ㉞ 能登島の 大橋渡り 水族館
- ㉟ 黒百合と 万年雪の 加賀白山
- ㊱ 窓岩へ 飛び来る 曾々木の 波の花
- ㊲ 故郷の キリコが揺らぐ 能登の夏
- ㊳ 江戸村に しのぶ昔の 暮らしぶり
- ㊴ 海士の手 に あわびさざえの 船倉島
- ㊵ 肝つぶす 子らは肩ごし あまめはぎ
- ㊶ 目に青葉 デカ山を曳く 青柏祭
- ㊷ 縄文の 真跡遺跡に 見る昔
- ㊸ 紅葉踏み 那谷寺ゆけば 芭蕉の碑
- ㊹ すくすくと 伸ばせ県木 アテの森

同封の「競技規則」には「次のようなルールを追加するのも楽しいでしょう。例

えば 3 祭 札 (㊦)の平国祭、(㊧)のお旅まつり、(㊨)の青柏祭、これらの札を3枚
セットで取れば、2点 2 社 札 (㊩)の気多大社、(㊪)白山比咩神社の札を、2
枚セットで取れば、1点」のように、類聚する札を取る作戦も示されている。

更に「郷土の姿を地図に入れてみよう。ヒントを読んで、○にいろはをい
てみて下さい。郷土の姿が見えてきますよ」として舳倉島を含む地図の付録も
ある。

だが、平成の市町村合併により行政区域も現在とは異なる場合がある。また、平
成に入って新たにできた施設もあるので、俳聖芭蕉の俳諧理念「不易流行」に鑑み、
新たな地域教材として平成版「かがのとかるた」の作成を試みる価値はあろう。

三 平成版「かがのとかるた」(試作品)について

昭和版を踏まえた平成版の地名(モニュメントを含む)や人名(ニックネームを
含む)の採択方針は、「なるべく昭和版と重複しないこと。重複する場合は明らか
に表現を変えること」「平成になってからできた名所および活躍した人物を採択す
ること」「地元だけでなく県外への観光PRにもなるスポットを採択すること」の
三点である。主に筆者が担当する人間科学部こども学科の「国語と言葉のゼミナ
ール」において試作した読み札は次の一覧のとおり。なお、複数案が出ていづれを採
用するか迷った札も、創作や推敲の過程を示すものとしてひとまず掲出しておく。

【平成版「かがのとかるた」読み札一覧】(試作品) ※音節数確定のため ルビを付けておく

- い 医王山 薬師如来の 葉草や
- ろ 炬開きや 口切りの茶を お点前で
- は 白山は しらやまびめの おすまいぞ
- に 日本海 サンセットブリッジ 内灘に
- ほ 北陸路 かがやき走る 新幹線
- と 戸室山 城の石垣 切り出せり
- り 立志式 大人の自覚 誓い立て
- る ルビーロマン 光る一粒 貴重品
- わ 和菓子愛で 茶屋街めぐる 東山

医王山 家族が集う スキー場

羽田から いらっし石川 能登空港

人形に 別れの供養 真成寺

舳倉島 海女の素潜り アワビ漁

智仁勇 安宅関の 物語

ぬ ぬばたまの 黒の漆や 輪島塗

を をかしけり 宵闇照らす 薪能

か 片山津 雪の博士の ふるさとよ

よ 嫁打ちは 子宝願ふ 予祝なり

た 辰口 ZOOつと登れば 動物園

れ 蓮根は 小坂の蓮の 泥田から

そ 総持寺や 托鉢巡る 雲水さん

ね 根上の まつもゆかしき ゴジラかな

ら ライトアップ 畔の煌めき 千枚田

う うらの町 自慢の料理 小松うどん

ぬ 亥の子餅 無病息災 祝ふなり

の 能登島に じんべいいるか 水族館

お 大桶焼き 手びねりヘラの 餛飩油

や 山中や 芭蕉ゆかりの 湯の名所(湯のけむり)

ま まるびいは 未来育む 憩いの場

け 兼六園 殿様気分の 散歩かな

ふ 二俣や 紙漉きの技 和紙の里

こ 米美味し(米どころ) 百万石の コシヒカリ

え 江戸村や 夏も冷たき 氷室あり

あ 浅野川 加賀友禅の 女川

あ えのこと 田の神様を おもてなし

か 河北潟 銭屋五兵衛の 夢遙か

よ 嫁礁や 狼煙の漁師 過てり

た 台湾に ガムを造った 八田技師

れ 歴博や 煉瓦造りの レトロ調

そ 鶴来には 虫と触れ合う 昆虫館

な 那谷寺や 紅葉の名所 奇岩窟

む 武蔵町 武蔵守の 屋敷跡?

卯 卯辰山 街を一望 望湖台

の と鉄道 桜のトンネル くぐり抜け

く 倶利伽羅や 歴史街道 火牛の計

ま るびいは アート育む 美術館

圭 圭佑の 逆転シフト これみらん

て 手取川 銘酒生み出す 伏流水

穴 穴水は 遠藤関の ふるさとだ

キ リコとは 祭りも墓も 灯籠ぞ

雪 雪吊りや 加賀の庭師の 巧みかな

妙 妙成寺 日蓮さんの 孫弟子や

獅 獅子舞や 色とりどりの 頭蚊帳

青 青柏祭 デカやま曳きつ 辻回し

③ 珠洲の海 揚げ浜式の塩作り
 ④ んんまいぞー まいもんの里 旬のネタ

では、読み札から注目される何句かをサンプル抽出して解釈と鑑賞をしてみたい。

まず、県庁所在地である金沢市関連の札から。

「兼六園 殿様気分の散歩かな」は「日本三名園の一つである兼六園は市民に開放され、江戸時代の藩主前田家の殿様になった気分現代の観光客は散歩できるのだなあ（有り難いことよ）」の意。詠嘆の終助詞は俳句の切れ字。しみじみとした余韻を醸し出す表現効果がある。

「まるびいは 未来育む 憩いの場」「まるびいは アート育む 美術館」は「金沢大学附属中学校・小学校・幼稚園の跡地に平成16年10月に開館した21世紀美術館は、芸術家の卵がゆつたりと想像の翼を広げて寛げる場であり、現代アートが創造される場である」の意。「まるびい」とは円筒形をした建物にちなんだ愛称。昨年10月に開館十周年を迎え入館者数は昨年9月末までに145万4342人となり、「奇跡」と呼ばれる程に中心部の空洞化を回避し街中に賑わい創出した。「兼六園」は「不易」を、「まるびい」は「流行」を象徴したモニュメント。伝統と現代、自然と人工が好対照であり、共に金沢を代表する観光スポットとなっている。

「医王山 薬師如来の薬草や」「医王山 家族が集う スキー場」は同じ地名を共有するが、奈良時代に白山を開いた泰澄大師が開山し薬草が多く病に靈驗灼かなことにちなんで命名された仏教的な「不易」の場と金沢市営スキー場として身近で気軽にウインタースポーツを楽しめる大衆的な「流行」の場が好対照である。

「浅野川 加賀友禅の女川」は女性的で優美繊細な手弱女振りを、「犀川や 菊水川」は男性的で大らかな益荒男振りを意識し対照させて詠んだ。

「江戸村や 夏も冷たき 氷室あり」は天然の雪氷を夏まで貯蔵しておくため湯涌に装置された場所。旧暦6月1日は前田家が江戸の徳川將軍家へこの雪氷を献上していた日。金沢の人々は氷室饅頭を食べ夏越し家族の無病息災を祈る「不易」の風習がある。

「湯涌には 夢二の想い 留まれり」は大正ロマンを代表する詩人画家の竹久夢

二を顕彰するため金沢市によって設立され平成12年4月に開館した金沢湯涌夢二館を指す。関係した女性の故郷金沢を旅で訪れ逗留。日本画に西洋画の技法を採り入れた美人画や風景画は近代的な商業美術の先駆けて「流行」を導いた。

次に、加賀地方関連の札から。

「辰口 ZOO」と登れば 動物園」は平成11年10月に辰口丘陵公園にオープン。いしかわ動物園は卯辰山麓にあったが手狭となり辰口に移転。23ヘクタールの敷地内は自然の地形を生かした中に動物たち本来の生息環境を再現している。基本コンセプト「楽しく、遊べ、学べる動物園」を標榜し、自然保護や動物愛護の精神を学べる場として遠方からも来園者が絶えない。そこで、遙々とやって来て更に坂道を進む人々を想像し、動物園の英訳「ZOO」を「登る」という動作や状態が長く続くさまを表す副詞「ずっと」に掛けた。

「鶴来には 虫と触れ合う 昆虫館」は昆虫と触れ合うことで自然の大切さを学ぶことができる施設として平成10年7月に開館した石川県ふれあい昆虫館を指す。所在地は白山市八幡町だが地元では北陸鉄道石川線鶴来駅に近いので鶴来の方が通る。日本海側最大規模の放蝶温室「チョウの園」が有名で何種類・何百匹もの蝶が飛び交う姿を一年中観察できる。他にも生きた昆虫を始め、昆虫の様々な生態や不思議を展示しており、小中学校の児童生徒の体験学習に資するコーナーもある。

「片山津 雪の博士のふるさとよ」は「雪は天からの手紙である」の名言で知られる加賀市出身で雪の結晶や人工雪などの低温科学の分野で世界的な研究を成した中谷宇吉郎博士を顕彰する目的で平成6年11月に開館した中谷宇吉郎 雪の科学館を指す。白山を望み柴山渚に接する片山津という環境で雪の結晶をイメージした六角塔三つを配置して設計された。雪と氷の実験や雪のデザイン賞を公募している。

次に、能登地方関連の札から。

「羽田から いらつし石川 能登空港」は平成15年7月開港した輪島市三井町の能登空港（愛称のと里山空港）を指す。陸上交通が不便で過疎化が進む能登半島の活性化に大きな役割が期待される航空施設で、空港ビルと行政機関を併設し能登地域の観光情報拠点「道の駅」としても登録された。羽田空港と60分で往来でき東京への

アクセス利便性を高めた。「いらっし」とは金沢の方言で「いらっしやいませ」という意味だが都会人には温かみが伝わるだろう。

「ライトアップ 畔の煌めき 千枚田」は平成23年6月に日本で初めて世界農業遺産（近代化の中で失われつつある土地の環境を生かした伝統的な農業、農法、生物多様性が守られた土地利用、農村文化、農村景観など）に認定された能登半島に広がる里山里海の景勝地「千枚田」の昼と夜の景観の対照を強調する。それは、田作りという生業の「不易」とライトアップという行事の「流行」の対照でもある。節電技術として平成に入り普及した「LED電球（太陽光発電パネルを付録中に充てる）」が幻想的なイルミネーションを描き出し地元民と観光客が共に夢の一時を過ごすだろう。

「能登島に じんべいいるか 水族館」は昭和57年7月に開館したが、平成21年8月パノラマ大水槽（八角柱型で最長対角距離30m、水深約5m）の整備が開始され、平成22年8月には「ジンベエザメ館 青の世界」がオープンシルカショーと共に人気を博している。そこで、甚平鮫（体にある模様を着物の甚平に似ていることから命名）に疑問表現「いるか」と「イルカ」を掛けてみた。

「んまいぞー まいもの里 旬のネタ」は撥音を示す仮名「ん」を語頭に置く。日本語の現代共通語では基本的に「ん」より始まる単語は存在しない。但し、碎けた口語や方言では「美味い」「生まれる」など語頭の「う」を鼻濁音「ん」で発音する場合もあるので「ん」を用いてみた。「まいもん」とは「旬の美味いもの」という意味の能登弁。穴水町が毎年春夏秋冬に開催する「まいもんまつり」を指す。

次に、平成に活躍した地元縁のスポーツヒーロー関連の札から。
「根上の まつもゆかしき ゴジラかな」は能美市根上町出身で星稜高校卒業の元プロ野球選手、国民栄誉賞を受けた松井秀喜氏を指す。「まつ」は根上の松（市の指定文化財。旧根上町の町名の由来となった黒松は樹高12メートル、推定樹齢100年で根が地面より7センチほど隆起している）と松井氏の「松」を掛け、更に現役時代のニックネーム「ゴジラ」を掛けた。大地にどっしりと根を張った松の巨木とバットーボックスに雄々しく立つ松井選手の姿、更に豪快に放つホームランとゴジラが吐く火炎のイメージが連想できるよう工夫した。今なお野球少年に夢と希望を与え続ける松井氏を顕彰する句。

「圭佑の 逆転シユート これみらん」は大阪府摂津市出身で星稜高校卒業のプロサッカー選手、FIFAワールドカップにも出場した本田圭佑氏を指す。黄金の

左足から放たれる強烈なシュートで積極的に相手ゴールを狙う姿は多くのファンを魅了する。そこで、句末の推量を表す助動詞を含む「見らん」（「観客は見るだろう」の意）と現在所属しているチーム名イタリアアセリエA・ACミランを掛けてみた。

「穴水は 遠藤関の ふるさとだ」は鳳珠郡穴水町出身で追手風部屋所属の現役大相撲力士・遠藤聖大氏（本名と同じ）を指す。身長184cm・体重143kgの体躯は、同郷で日本大学の先輩にも当たる大翔山関（本名は山崎直樹）と共に穴水町の「まいもん」を食べて育ったからかと想像するのも面白い。相撲が巧いイケメン力士として注目され、ザンバラ髪から鬘を結って土俵に上がる凛々しい姿は更なる活躍が期待される。

四 今後の課題について

地域教材として平成版「かがのとかるた」を試作したが、今後はこれを元に交流学習へと発展させたい。各校区の地名や人名を含む「校区かるた」は如何だろうか。例えば、金沢市立夕日寺小学校の校区ならば地名の「ゆうひでら」は五音節である。そこで、児童に上五と下五に使えることを教え、「夕日寺 朝日も似合う 学舎よ」「赤蜻蛉 茜に染まる 夕日寺」等の例句を示しながら日常生活を送る校区の様子を観察し、ここぞと気に入った場面をデジタルカメラで撮影する。そして相応しい五七五で言語表現する。それを専用フォーマットに整理しクラスで伝え合う。更に批評し合って秀作を選び校区の文化祭へ出品したり、「C」教育の一環としてWEB上で公開し全国や海外の小学校と交流したりするのも有意義ではないかと考える。

注

- (1) 文部科学省『小学校学習指導要領解説 国語編』（東洋館出版社、二〇〇八年八月）
- (2) 光村図書出版株式会社、二〇一一年六月発行（二〇一〇年三月検定済）74頁～82頁
- (3) 原口美貴子・山口幸男「郷土かるたの全国的動向―その社会科教育論的考察―」（群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第44巻 一九九五年）